2017年4月30日

福音書からのメッセージ

> すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。
> （ルカによる福音書24章31節）

エマオに向かう二人の弟子たちがいました。彼ら二人は歩きながら、エルサレムで起こった一切のことについて、ずっと話していました。イエス様がエルサレムに入り、とらえられ、十字架につけられ、死んで葬られた。ところが三日の後に女性たちが墓に行ってみると、イエス様の姿はそこから消えていた。そして墓に行った女性たちは二人の天使に、「あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ」と言われた。不安の中で、恐れの中で、彼らは話をしていました。その会話の中に、そして二人の歩みの中に、イエス様は入って来られました。

桃山基督教会では、再来週、伝道開始100年・礼拝堂聖別80周年を迎えます。ずっと記念誌のために、資料集めをしてきました。そこにあったものは、幾度となく訪れる苦難の足跡でした。戦争のこと、突然の別れ、活発に活動していた集まりがいつの間にか消えたこともありました。何年も洗礼者が与えられないことも、大切な人が教会から離れて行ったこともありました。

そのたびに、嘆きの声が聞こえてくるようでした。神さまのみ心に従って歩もうとしているはずなのに、神さまが喜ぶと思っておこなったことなのに、どうして。

しかし、もしもそれが嘆きのままでずっと続いていたなら、今この教会はなかったのかもしれません。でも今、わたしたちはこうして、桃山基督教会で賛美しています。祈りをささげています。100年の歩みが示すもの、それは苦難の歴史だけではありませんでした。苦しみも悲しみもあったでしょう。でもそれと同じぐらい、いやそれよりもはるかに優る喜びがあったのです。

エマオに向かった二人のそばには、イエス様がいました。一緒に語り合い、一緒に歩き、そして一緒に食卓を囲みました。わたしは思います。この二人の弟子は、わたしたち信仰者の姿なのではなかろうかと。わたしたちは何度だって、エマオに向かう弟子たちのように、イエス様の姿を見失い、恐れの中で歩いていきます。神さまって本当にいるの、守ってくれるの。どうしようもない不安の中で歩くのです。

でもふとした瞬間に、イエス様がいてくださっていることに気づかされてきたのです。自分たちの力だけで、歩いているのではない。イエス様がいつもいてくれる。その思いがこの教会の礎なのです。

エマオの物語は、わたしたちに伝えてくれます。イエス様は、いつもわたしたちと共にいてくださると。わたしたちが一人で歩いていると思っていても、必ずイエス様はいてくださいます。そのときにはイエス様とはわからなくても、心燃やされる瞬間、温かいものがあふれた瞬間、そのときに、イエス様の手はわたしたちを包み込んでいるのです。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/